

# 中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立

吉井敏幸

## はじめに

- 一 中世群集墓が断絶する場合——榛原大王山中世墓——
- 二 中世群集墓が近世へ展開する場合——奈良市古市中世墓——
- 三 惣墓成立の二つの段階

## おわりに

### 論文要旨

大和平野には惣墓と呼ばれる數カ村、数十カ村の村々からなる共同墓地があり、その起源は中世まで遡ることは明らかである。他方近年次々と中世墓遺跡が発掘されており、その事例が報告されている。本稿では、中世墓が近世へと展開できなかつた中世群集墓遺跡である榛原大王山遺跡と、本来は近世へと展開するはずの中世群集墓遺跡である奈良市古市城中世墓遺跡の二つの遺跡を対象として、惣墓成立の条件や成立時期を明らかにした。

まず榛原大王山遺跡の場合、周辺部の中世の状況は領主層（武士）が郡内一揆を形成しヒエラルヒシーに組織されていた。周辺の現在の墓制は両墓制地帯で埋葬は垣内墓、詣墓は家単位である。遺跡の中世墓地は領主層のうち中下級の層のものと見られ、郡内一揆の状況を反映した形態であり、また現在の周辺の墓制とつながる痕跡は見られなかつた。

古市城遺跡の中世墓もまた領主層の墓であり、墓地形態は周辺の地侍層の特

徴を反映している。この墓は築城のために十六世紀初期に破壊されたが本来はそのまま民衆墓として存続すべき墓であった。このことはわずかではあるが船型五輪塔など民衆の墓石も見られることからもいえる。遺跡のすぐ近くにある古市南共同墓地は、中世墓遺跡で見られるのと同じ様な墓石がある。また念佛講衆三人の名前を記す永禄九年の六字名号碑があり、この墓地を管理する念佛寺は念佛講衆の結集する寺院であり、墓地は念佛講衆のものであつた。

惣墓も古市城遺跡の中世墓のようにもとは武士層の墓または僧侶の墓であつたがその後民衆墓となつたものである。民衆墓化するのは村落の「惣」または「講」を背景としたものであり、そのような組織の形成が惣墓成立の条件である。したがつて惣墓の成立は、武士または僧侶の墓であつた段階と、それが民衆化した段階の二つの段階があつた。第一段階は平安または鎌倉時代、第二段階は戦国時代後期の十五世紀末十六世紀初期である。